

シンポジウム「国際共同研究・調査のいま」

日時：2024年12月7日（土）13時30分～17時30分

会場：東京大学本郷キャンパス法文2号館1番大教室

開会挨拶：斎藤 明（国際仏教学大学院大学特任教授、東洋学・アジア研究連絡協議会会長）
総合司会：守川知子（東京大学准教授）

報告 告：丸井雅子（上智大学教授）：遺跡地域史研究からみる国際共同研究・調査—カンボジア・アンコールにおける試み—

近藤二郎（早稲田大学名誉教授）：エジプト・ルクソール西岸の大型岩窟墓の国際共同研究・調査
高橋晃一（東京大学教授）：インド学仏教学における国際共同研究の諸相

岡村秀典（黒川古文化研究所所長）：戦時下の中国調査と戦後の日中共同研究—雲岡石窟の調査と研究を中心にして—

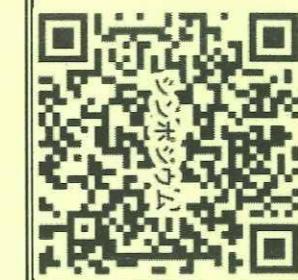
吉澤誠一郎（東京大学教授）：国際共同研究の今昔—中国近代史研究の場合—

/ 日本学術会議「アジア研究・対アジア関係に関する分科会」の活動報告

閉会挨拶：岸本美緒（お茶の水女子大学名誉教授）

聴講無料

参加をご希望の方は右のQRコードから、または氏名・
所属・メールアドレスを添えて iec@ttohogakkai.com
までお願いいたします。



〔報告要旨集〕

丸井雅子：遺跡地域史研究からみる国際共同研究・調査—カンボジア・アンコールにおける試み—

20年以上におよんだカンボジア内戦は1993年の国民議会選挙と新憲法成立によって終焉を迎えた。それ以降、国際的共同研究や調査がカンボジアで復活することになるが、当初は国際「協力」という意味合いが強かったと言えよう。特に発表者が専門とする考古学分野においては、世界遺産アンコールの文化遺産保護と国際協力という極めて政治的な文脈で研究・調査が実践されてきた。一方で従来の研究枠組みへの問い合わせ直しも様々なかたちで試みられている。本発表では、カンボジア・アンコール地域における地域に立脚した「遺跡地域史」研究について、分野横断的な国際共同プロジェクトとそこに付随する人材養成について紹介する。

近藤二郎：エジプト・ルクソール西岸の大型岩窟墓の国際共同研究・調査
エジプト・アラブ共和国ルクソール市対岸（西岸）のアル=コーカ地区で、新王国第18王朝メンヘテプ3世（在位：前1390～前1353年頃）の治世末の高官ウセルハトの墓（TT 47）は、マルナ時代直前の大型岩窟墓である。この墓やその周辺地域は不十分で、墓の平面プランも確定されてはいなかった。これまで実施した国際共同研究・調査について報告する。

高橋晃一：インド学仏教学における国際共同研究の諸相

インド学仏教学の分野において、国際的なネットワークは重要性を増している。例えばスコイエン・コレクション所収のサンスクリット語写本は国際的な研究グループによる成果があげられている。また、国際的共同研究を円滑に行うためのプラットフォームも次第に充実しつつある。共同研究の実情とこれからの方針について報告する。

岡村秀典：戦時下の中国調査と戦後の日中共同研究—雲岡石窟の調査と研究を中心にして—
中国山西省に所在する雲岡石窟は、遊牧国家の北魏が開いた仏教寺院である。京都大学人文科学研究所の前身である東方文化研究所は1938年から7年間にわたりここを調査し、戦後、日英語版の報告書『雲岡石窟』全16巻32冊（1951～56年）が刊行された。私たちはその全冊のPDFを京都大学学術情報リポジトリに公開するとともに、現地の研究機関と共同研究を進めながら出土遺物や調査記録を再整理し、新しい研究成果を4巻9冊に増補した日本両国語版『雲岡石窟』各20巻41冊（2013～18年）を中国社会科学院考古研究所との共同編集により出版した。

吉澤誠一郎：国際共同研究の今昔—中国近代史研究の場合—

共同研究については、様々な目的がある。すぐ思いつくのは、個々の研究者の異なる視点や手法を交錯させながら、共同で一つの課題に向かうことで豊かな成果を挙げようとする点であろう。しかし、そのなかで国際共同研究とは特別な意義があるのであるのだろうか。その問い合わせについて、私が知る中国近代史研究に即して、少し考えてみたい。また、昨今の厳しい国際情勢のもとで、改めて意識しておくべき点についても言及するつもりである。